

(2) 小・中学校の連携

情報交換の一層の充実

不登校にかかわる子どもの状態や様子は、常に同じではありません。休日や長期休業の前後、学期の区切りなどでも変化します。また、その時々周囲の人たちの対応のしかたによっても異なります。大切なことは、きめ細かな視点で子どもの姿をとらえ、情報を蓄積するとともに、その情報をきちんと伝達していくことです。

そこで、次のような観点で記録を作成し、その情報を伝達することが大切です。

[p . 39参照]

- ・ 不登校になった原因や背景
- ・ 家庭の状況や子どもの生育歴
- ・ 学校の体制と対応の方針（方向性）
- ・ 子どもの姿とその時の対応や教職員の考え
- ・ 家庭訪問の実施状況
- ・ 関係機関や地域との連携の状況
- ・ 特別な配慮や支援が必要な子どもの状況
（保健室や別室への登校、個別対応を必要とする子ども等）
- ・ 学習規律や集団生活のルールと指導の状況

小・中学校間における交流

小学校から中学校に進学した時点で、不登校の子どもが急激に増加することの原因として、学校間における生活スタイルや指導体制のちがい等が、子どもたちにとって大きな負担となっていることが考えられます。

このことをふまえて、小学校の教職員が中学校のことを、中学校の教職員が小学校のことを、これまで以上に積極的に理解していくことが大切です。その上で、子どもたちが中学校へ進学する際に感じる負担を軽減させていくことが必要です。

小・中学校間の交流を深める取り組みとしては、次のようなことが考えられます。

- ・ 小学校と中学校の教職員を入れ替えての交換授業
- ・ 小学校と中学校の教職員が協力して行う合同授業
- ・ 体育祭や運動会、文化祭など、それぞれの学校行事への参加
- ・ 校内研修会の合同開催
- ・ 地域における行事等への参加